

神戸大学を Hub とする宇宙人類学研究：
日本の宇宙開発とオーラルヒストリー研究
JSE-OHP (Japan Space Exploration Oral History Project) について

京都文教大学総合社会学部 准教授 佐藤知久

2014年9月から、私たち宇宙人類学研究会¹のメンバーは、JAXA 大学・研究機関連携室（2015年4月からは宇宙科学研究所科学推進部大学共同利用課）と協働して、日本の宇宙開発にたずさわってきた方々へのインタビュー・プロジェクトを実施している。これは、日本の宇宙開発の歴史を、その現場にたずさわってきた個人一人一人の視点、ものの見方を通じて記録していこうとするプロジェクトである²。私たちはそれを、「JSE-OHP (Japan Space Exploration - Oral History Project)」と呼んでいる。

現在までに私たちは、旧 NASDA (宇宙開発事業団) 職員計 7 名へのインタビューを終えており、今後も継続する予定である。聞き取りは、JAXA スタッフが同席するかたわら、岡田浩樹 (神戸大学)・佐藤知久 (京都文教大学)・岩谷洋史 (国立民族学博物館) らによって行っている。一人当たりの聞き取り時間は約 4~5 時間である。録音された内容は書き起こされ、JAXA およびインタビュー参加者による確認を経て、現在のところは JAXA 内に保管されている。書き起こされたテキストは、JAXA とその方法を協議しながら近い将来に公開される予定である (インタビューの実施方法と検討中の公開方法の詳細については後述する)。

本稿の目的は、このプロジェクトの概要について報告することにある。JSE-OHP が何を目的とし、どのようにインタビューをすすめ、その成果を今後どのように活用する予定なのか。背景にある考え方をふくめて、現時点までの経過を報告したい。

1. オーラルヒストリーという手法

まずはじめに、なぜインタビュー、なぜオーラルヒストリーなのか。

手法としてのオーラルヒストリー *oral history* とは、主に歴史研究そして広く人文・社

¹ 文化人類学者を中心に 2012 年から活動している研究会で、日本文化人類学会課題研究懇談会に指定されている。主要な関心や研究の目標は、岡田浩樹・大村敬一・木村大治編『宇宙人類学の挑戦：人類の未来を問う』（2014 年、昭和堂）にまとめられている。

² 本プロジェクトは、科学研究費「宇宙開発に関する文化人類学的アプローチの検討」（研究課題番号：25580181、研究代表者：岡田浩樹、研究期間：2013 年 4 月 1 日～2015 年 3 月 31 日）および「宇宙開発技術者に関するオーラルヒストリー調査」（研究課題番号：15K12958、研究代表者：岡田浩樹、研究期間：2015 年 4 月 1 日～2017 年 3 月 31 日）による助成を受けている。

会科学領域において用いられる研究方法の一つである。口承史、すなわち個人一人一人の視点と記憶にもとづいて語られたことからの記録を通じて、歴史記述を行う手法である。

具体的には、①何らかの歴史的・社会的出来事について個人個人の視点から語られる話を聞き、②その語りを資料化し、③それらの資料を総合的に用いることによって、当該の歴史的出来事に関する記述を試みる。こうした研究手法は、公式記録が残っていない政策決定プロセスにおいて何が起きていたのかを当事者への聞き取りから再構成する政治史研究（御厨 2002）や、東日本大震災についての「個人的で主観的なかたちで吐露される経験」を聞き取ることによって「被災を理解する」（とうしんろく 2012:23）活動など、多様な領域で活かされ成果をあげている（トンプソン 2002）。

オーラルヒストリーという手法を用いる目的は、「出来事に具体的に関わった人々の記憶を通して、公式記録に表れない、または公式記録とは異なる歴史記述を手に入れること」（瀧川 2010:134）にある³。公式記録から漏れた事実についての証言や、出来事についての個人的な感情や情動、その人なりの視点から見た出来事のさまざまな意味などを収集することによって、オーラルヒストリー研究は、個人の主観において想起され語られる物語としての「他者の世界を、複雑な深部まで」（ヤウ 2011:52）理解する役に立つのである。

オーラルヒストリー研究は、ある時代・社会・集団などの様子を、全体として・ひとつのシステムとして分析するのではなく、個別かつ特定の個人個人の視点から見たものとして、個人個人の活動や行為を通じて、いわば小さな歴史の集積から記述しようとする点において、歴史や社会を全体論的に見ようとする立場（たとえばルーマンの「社会システム論」）とは対照的である。それは上空から眺めた鳥の目のような視点から単線的に歴史を見るのではなく、地上すなわち普通の人々の等身大かつ複数の視点から、複線的に歴史を描くのである（野家 2005）⁴。

2. 宇宙開発とオーラルヒストリー

ではオーラルヒストリーの手法が、宇宙開発およびその歴史とどのように関係するのか。ここでは NASA の取り組み事例を参照しながら述べよう。

2-1. NASA における歴史記録

NASA は 1958 年の発足一年後から、その歴史を記録するプログラムを独自に開始している。「ヒストリー・プログラム・オフィス」という専門部局⁵が設けられ、現在に至るまでそ

³ ここでいう「公式記録」とは、組織や企業が公式に提示した記録というだけでなく、時の主流なメディアによる報道や、研究者らによる全体論的な歴史記述等をふくむ。

⁴ ただし後に述べるように、オーラルヒストリーと全体論的歴史記述とは、どちらかのみが正しいというものではなく、歴史記述において相互補完的な役割を果たすべきものであると考えられる。

⁵ <http://history.nasa.gov/index.html>（最終閲覧日 2015 年 11 月 15 日。以下同様）

の活動を記録し続けているのである。その成果はニューズレターなどの定期刊行物に加え、数百冊以上の書籍⁶（その多くは電子版で無料公開されている）として刊行されている。さらには、歴代の広報資料・各ミッションの交信記録・歴代長官のスピーチなどが、デジタルアーカイブ⁷として公開されている。ヒストリー・プログラム・オフィスによるこれらの記録のボリュームは圧倒的である。NASA は、ひとつひとつのプロジェクトの遂行に沿ってなされるリアルタイムの広報活動において優れているだけでなく（スコット、ジュレック 2014）、活動の事後に行われる記録の公開においても、積極的に情報提供しているのである。

広報活動とは別に、なぜこのように充実した、それも体系的に収集・保管・公開されている歴史記録の作業を、NASA が行っているのだろうか。その理由は二つ考えられる。①外部研究者・作家らによる資料の利活用、②NASA の活動を中長期的なパースペクティブから見た総体的理解の促進、の二点である。

たとえば、文系読者によって読まれうる良質な書物・論文・記事を生産するのは、人文社会系の研究者やライターである。だが、フィールドワークを行う人類学者らや実験を直接行う心理学者らを除けば、多くの人文社会系研究者は、公表されている資料を用いて研究を進めることが多い。したがって、たとえ宇宙活動に関心があっても、限られた資料しか入手できなければ、人文・社会系読者にとって宇宙を扱うリーダブルな言説の生産（①）は抑制されるだろう。結果として宇宙開発に関するより広いパースペクティブからの理解（②）も、停滞せざるをえないはずである。

これは特に本特集の文脈においてきわめて重要な点である。なぜなら、宇宙開発や宇宙活動の成果が社会全体に広く理解され、共感が広まり、新たな活動のアイデアが社会から発生するためには、科学的・技術的に優れた文献のみならず、多様な視点から描かれた、良質な人文・社会科学的テキストが多くの読者に入手可能であることが決定的に重要だからだ。

NASA について書かれた、NASA 以外の人々による、それも文系的観点からの歴史研究が多いのは、単に NASA の成果が強い社会的インパクトを持つというだけでなく、こうした研究や言説を生み出し、触発する基盤となる資料を積極的・体系的に公開していることもその主な理由ではないだろうか。NASA の事例は、宇宙開発・宇宙活動に関する人文・社会的な観点を含めた資料環境の充実が、宇宙に関する言説を生み出す基盤（その多くは現代において、デジタル・アーカイブズとして実現している）となることを示唆している。付け加えるなら、宇宙空間が人文・社会系研究者にとって直接調査困難な場所であり、宇宙開発が国家的なプロジェクトとして NASA や JAXA のような中核的機関によって担われてきた以上、こうした資料を提供できるのは基本的に、それらプロジェクトを遂行してき

⁶ <http://history.nasa.gov/series95.html>

⁷ <https://historydms.hq.nasa.gov>

た中核的機関以外にはありえない⁸。歴史記録とその公開の試みは、広報活動と同様、宇宙開発と宇宙活動についてのより広い社会的理解の基盤をつくるために不可欠だといえるだろう。

2-2. オーラルヒストリーを収集する意義: ジョンソン宇宙センター オーラルヒストリー・プロジェクト

宇宙開発にたずさわった人々のオーラルヒストリーは、NASA 自身が自らの歴史を記録し発表する活動の一環として、NASA 本部だけでなく各センターごとにも収集されている⁹。各センターが収集したオーラルヒストリーのなかで、ジョンソン宇宙センターの「オーラルヒストリー・プロジェクト」¹⁰は最大規模のものであり、JSE-OHP においても、主なモデルとして参照している。

ジョンソン宇宙センターのオーラルヒストリー・プロジェクトは、1996 年に開始された比較的新しいプロジェクトである。その目的は「宇宙と月への道を初めて米国と世界に提供した諸個人たちの歴史を記録すること」にある。参加者には「マーキュリー、ジェミニ、アポロ、スカイラブ、シャトルのそれぞれのプログラムにおいて主要な役割に従事した、マネージャ、エンジニア、技師、医師、宇宙飛行士、その他の NASA 職員、航空宇宙関連業者」などがふくまれる。こうして記録されたオーラルヒストリーは、「これらパイオニアたちの言葉が、宇宙開発の熱気と教訓について、未来の世代に向けて語り続ける」ことを可能にすると考えられている¹¹。

インタビューは 1997 年に開始され、これまでに収録されたオーラルヒストリーは 675 人分を越えている。一人一人のインタビューの書き起こし（トランスクリプション）は場合によって数十ページに及び（同一人物に対して複数回インタビューが行われることもある）、PDF にまとめられてウェブ上で公開されている。数百人分の PDF によって校正される資料全体のボリュームはきわめて大きい。プロジェクトは現在も継続中である。

インタビューの収集、保管・公開に関するアーカイブ化の手続きは、以下の要領で行なわれている。

まず第一に、聞き取り前に広範囲にわたるリサーチを行い、個々人の伝記的プロフィールを作成する。次に、個々人がジョンソン宇宙センターでの宇宙開発においてどのような歴史的貢献をなしたかに焦点をあてて、話題と質問を準備する。そのうえで、1~2 人のインタビュアーによってインタビューが行われる。インタビューに際しては、権利関連の同意書に署名がなされる。

⁸ もちろんこれまでも、日本の宇宙開発に関する人文・社会的研究が存在しなかったわけではない。ここで私が主張しているのは、宇宙開発に関する人文社会科学的な「一次資料の蓄積」が少なかったということである。多くの研究者は、自分が実施したインタビューの書き起こしデータそのものは公開しない。

⁹ 収集されたオーラルヒストリーのリストは、

<http://history.nasa.gov/oralhistory/centersinventory.xls> に公開されている。

¹⁰ http://www.jsc.nasa.gov/history/oral_histories/oral_histories.htm

¹¹ 前掲注 11 と同じ。

インタビューは録音され、テキスト起こしされる。作成された音声データとトランスクリプションは、参加者による正確さについてのチェックを経て、公開用のデジタルファイルとして準備される。

同じデータが原本として、伝記的プロフィールとともに、物理的に（音声ファイルは CD として、トランスクリプションはプリントアウトとして）NASA JSC History Collection¹²（ヒューストン大学クリアーレイク校ニューマン・ライブラリー内にある）に保管される。このデータのデジタル・バージョンが、HTML および PDF として、JSC OHP のウェブ上にアップされ、デジタル・アーカイブとなる。アーカイブズの管理は、大学の図書館が行っている。管理スタッフは大学図書館に所属する専門のアーキビストが行っている。

このようにして記録・整理されたオーラルヒストリーのアーカイブが、多様な利活用が可能な状態で公開されているのである。NASA が公開している他の資料と合わせて用いることで、一般市民はもとより、研究者にとっても貴重な資料となっている。

2-3. 公式記録とオーラルヒストリーの相互補完性

以上みてきたように、NASA は膨大な記録に加えて、オーラルヒストリーの収集・記録・公開を積極的に行っている。では、宇宙開発という領域において、一般的な歴史記録作業に加えてオーラルヒストリーを収集するその理由は、どこにあるのだろうか。

宇宙開発事業を推進する上で必然的に発生するさまざまな記録（アーカイブズ学ではこれを「現用文書」と呼ぶ）のなかには、長期にわたって保管・公開すべき情報が当然含まれている¹³。現用文書に記録されるのは主に、作業にたずさわる当事者たちが共有すべき、言語化・データ化可能な「明白な知識 explicit knowledge」（「理論知」や「形式知」とも呼ばれる）である。これが公的記録の母体を形成する。

これに対して、たとえば、あるプロジェクトが成功に至ったときの「開発現場の雰囲気」や「スタッフ間のコミュニケーションのあり方」など、その当時にはあえて記録し共有する必要がないと見なされがちなことがらは、公的な記録に残りにくい。「個々人がそのプロジェクトにどのような思いで参加したか」「当時の自分にとってもっともやりがいのあった作業とは」「今思い返したとき、かつて最も困難だったことや、逆に楽しかったこと」などのように、個人的な動機や関心、感情など、主観的なことがらも同様である。その当時に

¹² <http://blogger1.uhcl.edu/archives/jsc-history-collection>

¹³ 宇宙開発の現場からは、膨大な作業書類や手順書などの現用文書が発生する。それらの文書は、記録された情報が業務上必要である期間は保管され、当面の目的から見て不用な文書（「非現用文書」）だと見なされれば、いずれ廃棄されるだろう。もちろん、当面必要でなくなった書類のなかにも、長期的観点からみれば有益な情報が残されている可能性は高い。未来の視点から見れば、今はささいなメモにしか見えないものも重要な価値を持ちかねないからである。国家予算を用いて行った事業によって生まれた知的な価値は、広く社会的に還元されるべきだという観点からすれば、非現用文書のなかに潜在するであろう価値ある情報は、長期保管すべきかどうかというアーカイブズの視点からも、新たに評価選別され、アーカイブ化されるべきであろう。

は言語化不能だったが今なら明確に語れることも、当時の公的な記録には残りにくい。

宇宙飛行士が宇宙空間で経験したことがらやそれに関わる感情は、当人の口から聞く以外にそもそも記録が困難であり、オーラルヒストリーによる収集と記録が不可欠である。あるプロジェクトがさまざまな困難を切り抜けていく局面ごとの様子も、詳細な公的記録と個々人の視点からみた印象とを併記することで、より立体的に把握できるだろう。

このように、「共有」されておらず個人的に所有されたままの知識や、その当時は明確にできなかった知識、すなわち主観的な経験知が、巨大プロジェクトとしての宇宙開発には多数存在することが予想される。公的に「書き記すに値する」とそのとき思われたこと以外にも重要な情報が、宇宙開発には数多く付随するのである。個々人一人一人がそれぞれの「現場をどのように経験したか」を掘り起こすことによって、オーラルヒストリー研究は、宇宙開発という巨大なプロジェクトを歴史的に記述するにあたって不可欠な知識を補完する。それは骨組みとしての公的記録に血を通わせ、人々の顔が見える歴史を描くための手助けとなる、といえるだろう。

2-4. 暗黙知を描き出すために

オーラルヒストリーにはこのように、宇宙開発の現場にいない外部の一般市民や後世の研究者にとって、特にその歴史を重層的にとらえる上で大きな意味があるが、それだけではなく、宇宙開発を行う主体である中核的機関にとってもまた、重要な意義があると考えられる。

ジョンソン宇宙センターのオーラルヒストリー・プロジェクトの中には、下位プロジェクトとして「スペースシャトル計画の暗黙知をとらえるプロジェクト」(NASA JSC Space Shuttle Program Tacit Knowledge Capture Project)がある。これは、スペースシャトル計画の主要メンバー20名へのインタビューであり、「プログラムにとってのクリティカルな意思決定や、マネジメントのプロセス」などのディテールについての語りを記録している。

たとえば、1986年のチャレンジャー号事故当時のプログラム・ディレクターであるアーノルド・アルドリッチが、事故後二十二年目の2008年に事故原因をふりかえった語りが公開されている。そこで彼は「シャトル計画のシニア・マネージャーたちがサイオコール社のエンジニアたちの懸念に気づかなかったことについて、チャレンジャー事故を分析した多くの人々が『信じがたいことだ』と書いている。私も同様にそれを極めて信じがたいことだと思う。しかし実際には、それが事実だったのだ」¹⁴と述べている。

今から見れば信じがたいこと、自分自身がその現場の一部を構成しながら、なぜそんな当たり前のことに気づかなかったのかわからないようなことが、なぜ実際に起きてしまうのか。こうした失敗の原因を突きとめることは容易ではないが、一人で考えるのではなく対話しながら原因を探求したり、複数の語りを複合的に組みあわせて誰も気づいていなかったことをあぶり出していくことはできる。一人で「書いて」もらうのではなく、自由に

¹⁴ http://www.jsc.nasa.gov/history/oral_histories/SSP/AldrichAD_Challenger.pdf

話題や視点を転換させることが可能で、場合によってはそのなかに矛盾すら存在しうるようなやり方で「語って」もらうことによってこそ、失敗を生み出してしまった「暗黙知 tacit knowledge」¹⁵により近づくことができるのではないだろうか。オーラルヒストリーは、専門的な視点をもった質問者によって触発されながら当時の出来事をゆっくりと想起し、自由に語ってもらうことによって、当時の人びとがもっていた「暗黙の了解」がどのように形成されたのかを掘り起こすきっかけともなりえるのである。

宇宙開発のように極めて高い信頼性が要求されるプロジェクトにおいては、(成功と失敗双方につながる)暗黙知への着目は不可欠だ。ある失敗が生じた後に信頼性を回復するためには、もちろんその原因を取り除き対処することが必要だが、長期的な観点からみて重要なのは、その失敗の原因を特定するだけでなく、失敗の原因が発生するのを許した環境的要因に遡って原因を究明することである。「意識されていなかった原因」としての「その失敗を生んだ暗黙知」の抽出は(一般的な「失敗学」研究の事例としても貴重であるが)、宇宙開発を実施する主体である機関にとって、内部での研究や研修のためにも重要な意義をもつだろう。オーラルヒストリーの収集は、失敗をどう乗り越え、成功をどう導いていくか、その複雑なプロセスを複雑なまま理解する、豊かな事例研究の資料にもなりえるのである。

3. JSE-OHP

以上のように、宇宙開発や宇宙活動を記述する上で、オーラルヒストリーが果たしうる役割はとて大きいと考えられる。そこで最後に、こうした問題意識を持ちながら私たちが現在行っているプロジェクトについて、簡単に報告する。

3-1. プロジェクトのきっかけ

JSE-OHP が生まれたきっかけは、2014年当時 JAXA 広報部に所属していた山内光則氏の「ロケットの昔話をまとめた冊子を作ろう」というアイデアにある。それは、「宇宙開発推進本部、NASDA、JAXA の発足経緯とその成果」をベースに、Q ロケット以前の小型ロケットに始まり、HOPE/HTV に至る機体開発を一方の軸に、エンジン・飛行安全・飛行解析・構造・誘導・搭載電子機器・地上設備・射場設備・打ち上げ・現地対応などの諸技術をもう一つの軸としたマトリックスをつくり、そのそれぞれの項目について現場を担当した人々が、自分たちの思い出を執筆しようというものだった。

以前にも NASDA では、公式記録以外にこうした文集・記録集が編まれたことがあると

¹⁵ 暗黙知とは、言語化困難だが存在している知のことだ。「私たちは言葉にできるよりも多くのことを知ることができる」(ポランニー 2003:18)。それはたとえば、「運動技能、顔の認識などのパターン認識から、数学の証明を直感的に洞察すること」などである(『岩波哲学・思想事典』55 ページ)。認知プロセスの多くが自己認識できない認知的プロセスをふくむ以上、私たちの活動のほぼすべてにおいて暗黙知が機能しているといっても過言ではない。

聞くが、山内氏のアイデアはそのひとつであるとともに、宇宙開発推進本部の時代から現代までを対象とする点で、包括的な歴史記録の意図を持つものであった。それは JAXA 内部に、内発的に、個々人の経験知を長い歴史的パースペクティブのなかに位置づけながら保管しようとする意図、それも公的記録とは異なる私的な視点から記録し残していくべきではないかという思いが存在していることを示している。

そのアイデアを、宇宙開発と宇宙活動に関心を寄せている宇宙人類学研究会のメンバー（人類学者はインタビューという手法も熟知している）が協力することで活かそうということになり、JAXA と人類学者たちが協働して、日本の宇宙開発の現場にたずさわってきた人々のオーラルヒストリーを収集しようというプロジェクトが生まれたのである。

3-2. 具体的な実施方法

守秘義務について

JSE-OHP プロジェクトは、JAXA と神戸大学とのあいだの共同研究契約書に基づいて実施されており、参加する研究者は共同研究契約書に記載された守秘義務を負っている。

記録作成の流れ

- ①インタビューの実施：インタビュー対象者の選定と交渉は JAXA が行い、インタビューも原則として JAXA オフィスにて行われている。インタビュアーは研究者 2～3 名であり、JAXA 職員数名が必ず同席している。録音と録画は JAXA のみによって行われ、オリジナル・データは JAXA 内に保管される。
- ②JAXA により、速記録（第 1 版）の作成が行われる。できあがったテキストファイルをもとに、研究者と JAXA による言い間違いや流れの混乱等を微修正した速記録（第 2 版）が作成される。
- ③速記録（第 2 版）をインタビュー対象者が校閲し、研究者と JAXA が再度補正した速記録（第 3 版）を作成する。これが「インタビュー記録公開版」となる。

利用のための権利処理

オーラルヒストリーは個人の語りであるため、語りの主体には著作権が発生する。本プロジェクトでは、収集されたオーラルヒストリーの学術的利用を促進するために必要な権利処理として、以下の点について記した同意書を作成している。①インタビュー記録公開版とその原稿についての著作権は JAXA に帰属すること、②インタビュー記録公開版にインタビュー対象者の著作物が含まれる場合は、機構によるその利用を無償で許諾すること、③第三者又は外部に発表されたインタビュー記録公開版について、第三者による学術研究を目的とした引用を認めることを無償で承諾すること、などである。インタビューの際は、インタビュー参加者にこの同意書への署名をいただいている。

3-3. これまでの成果と今後の予定

以上の形式にのっとして、本プロジェクトは 2015 年度までに、元 NASDA 職員の方々 7

名へのインタビューを実施した。現状ではまだインタビュー記録公開版が完成したものはなく、公開に向けて作業を進めているところである。公開版がまだ完成していないため、本稿ではインタビューで語られた具体的内容について報告することができないが、インタビューに参加していただいた方々には、生い立ちからはじまって、なぜ宇宙開発にたずさわろうと思ったのか、NASDA から JAXA（およそ 1960 年代の終わりから現在まで）に至る日本の宇宙開発の現場での貴重な経験について、非常に詳しくかつ率直に語っていただいている。これらのデータが公表されれば、日本の宇宙開発についての貴重な記録として、JSE-OHP は人文・社会科学系の研究者を中心とする利用者にとっての基礎資料を提供する役割を果たしうるであろうし、現在宇宙開発にたずさわる方々にとっても、過去の経験と照らし合わせて現在の位置を知るための貴重な資料となるものと考えている。

現在の段階では、JSE-OHP の公開方法として、①JAXA による研究開発活動及びその成果の発表、②学術的な目的に限った利用のための公開のふたつを想定している。NASA の JSC OHP のように完全に一般的な公開ではないのだが、学術目的に絞って公開していただくだけでも、広く宇宙開発活動について言及するための言説基盤を整備することは一定程度可能であると現状では考えている。

4. おわりに

オーラルヒストリーは、後世の人々の利用に供されることを目的として、歴史的資料となることを意識しながら行われる「語り」である。音声言語で語るということは、文字で自分の思いを表明するのとはおのずから異なる様相において言語を発することである（野家 2005）。それは言語だけでなく、さまざまなパラ言語情報（態度・意図・感情）や非言語情報（表情・身振り・動作）を表出しながら対話の空間をつくりあげ、何かを伝えようとする行為でもある。その意味で語りは、誰かによる誰かに向けての語り以外のなにものでもない。そこに語られるのは単なる情報ではなく、聞き届けられることを欲する声そのものである。

たしかに個人の語りは本来的に断片的である。だがそうした断片性、大きなプロジェクトの一部をひとりの人間が行ってきたことがらを通じて体験するほかないないという等身大の認識ゆえにこそ、私たちは、他者の経験への共感の土台を築くことができるのではないだろうか。宇宙開発にたずさわってきた個々人の動機や時々の感情、当時の現場の雰囲気、時代感覚、その場の誰もが前提としていた知識や常識、宇宙空間での身体感覚、プロジェクトメンバー同士の相互理解の深さなど、公式記録に残りにくい個人所有の知識や暗黙の知識は、宇宙開発というプロジェクトが遂行される上で決して無視できないものであるだけでなく、多くの人にとって共感とともに理解され得るものである。それは、巨大プロジェクトとしての宇宙開発も、最終的には個々人の人生における一つ一つの認識と行為の積み重ねに他ならないからではないだろうか。

そして歴史的現実もまた実際のところは、個々人によって異なる認識の集合体なのであ

って、「それぞれが正しくて、しかも対照をなし、すべてが唯一のものへ還元されるわけではない多くのヴァージョンが存在する」なかで、「それらヴァージョンを包む全体の編成のうちに」あるものではないだろうか（グッドマン 2008:24-25）。オーラルヒストリーは研究手法としての曖昧さを拭い去れないのではないかとしばしば指摘されるが、むしろそれは、歴史のさまざまなヴァージョンを複数記録することによって、よりリアリティのある歴史認識を得ようとする試みだといえるだろう。

オーラルヒストリーの収集・記録・保管は、ある意味で、自分たちの歴史を記録する資料を自分たちで作るといって、コミュニティ・アーカイブの活動に似ている（Flinn et al. 2009）。それは自分たちで、自分たちの歴史はこのようなものであったのだということ、次世代に伝えようとする行為である。「声」を集め、聞きとどけることができなければ、それぞれの個の経験は結局のところ、公的な記録のなかに溶解してしまう。こうした流れに抗するかのよう、日本の宇宙開発を支えている人々からなる大きなコミュニティが、全体の骨組みを描いた大文字の歴史記述から抜け落ちた個人的な知を、いままじずつ記録し公開しようとしている。そのプロジェクトに、オーラルヒストリーという手法を用いて参加できていることを、私たちはうれしく思っている。

文献

Flinn, Andrew, Mary Stevens, and Elizabeth Shepherd. 2009. Whose memories, whose archives? Independent community archives, autonomy and the mainstream. *Archival Science* 9. Springer Netherlands: 71–86.

岡田浩樹・大村敬一・木村大治（編）（2014）『宇宙人類学の挑戦：人類の未来を問う』昭和堂。

ネルソン・グッドマン（2008）『世界制作の方法』菅野盾樹訳、筑摩書房。

デイヴィッド・ミアマン・スコット、リチャード・ジュレック（2014）『月をマーケティングする：アポロ計画と史上最大の広報作戦』関根光宏・波多野理彩子訳、日経 BP 社。

瀧川裕貴（2010）「オーラルヒストリーアーカイブズ：オーラルヒストリーの収集および分析戦略について」『大学利用機関の歴史とアーカイブズ 2009』総合研究大学院大学。

とうしんろく（東北大学震災体験記録プロジェクト）編（2012）『聞き書き震災体験：東北大学 90 人が語る 3.11』新泉社。

ポール・トンプソン（2002）『記憶から歴史へ：オーラルヒストリーの世界』酒井順子訳、青木書店。

御厨貴（2002）『オーラル・ヒストリー：現代史のための口述記録』中公新書。

野家啓一（2005）『物語の哲学』岩波書店。

マイケル・ボランニー（2003）『暗黙知の次元』高橋勇夫訳、筑摩書房。

ヴァレリー・R・ヤウ（2011）『オーラルヒストリーの理論と実践：人文・社会科学を学ぶすべての人のために』吉田かよ子監訳・訳、平田光司・安倍尚紀・加藤直子訳、インターブックス。